

書評 3-1

クレア・マリィ著

切り抜ける・交渉・談判・掛け合い

『発話者の言語ストラテジーとしてのネゴシエーション行為の研究』

ひつじ書房、2007年

言語学における クィアな視点

金城克哉

1 アイデンティティに着目した重要な成果

チョムスキーの登場から半世紀を経た現在、言語研究は「音韻」、「形態」、「統語」、「意味」という四つの分野における理論研究 (formal linguistics) が主流となっている。一方、例えば人は実際にどのように言葉を用いているのか、言葉を用いることで人は何を行っているのか、などを扱う語用論や社会言語学、談話研究といった分野は周辺的なものであると捉えられる傾向にある。そういった状況の中にあって、言語におけるジェンダーやセクシュアリティをクィアな視点から捉えるという研究は、日本語に関する限り、これまでほとんどなされてきていない。このような現状を考えると、クレア・マリィ著『発話者の言語ストラテジーとしてのネゴシエーション行為の研究』は画期的な研究成果であると言えよう。以下、構成・内容・研究目的を概観した後、(セクション2)、キーワード(セクション3)、方法論(セクション5)の順

に本書を批判的に検討したうえで、まとめとしてこれからの言語学におけるクィア研究の方向性について触れる。

2 構成・内容・研究目的

『発話者の言語ストラテジーとしてのネゴシエーション行為の研究』（以下、「本書」とする）は理論的背景の提示、先行研究の検討を経て具体的な事例の考察、総括および問題提起という順に執筆されている。特に第2章の先行研究の詳細な検討は特筆に値する：

第1章：ジェンダーとことばの研究 (pp.1-16)

第2章：批評的考察 (pp.17-44)

第3章：規範と実践を行き来する発話行為 (pp.45-62)

第4章：〈日本語・ジェンダー・セクシュアリティ〉 (pp.63-122)

第5章：座談会の談話分析 (pp.123-162)

第6章：かいくぐり、切り抜けるネゴシエーション (pp.163-186)

本書の内容を筆者なりにまとめると、次のようになる：

日本語には異性愛規範が働いており、それを窮屈だと感じる発話者はネゴシエーションという手段を用いてその規範を切りぬける。その手段を用いることで発話者は複合的アイデンティティを実践する。しかし、その実践によって現われる複合的アイデンティティは流動的なものであり、残留することはなく、発話者の体験の中のみ存在する。そのため、研究方法として発話者自身が過去の自分の行為について語るその内容(=ナラティブ)に焦点を合わせる。

次に本書の研究目的を確認する。本書の冒頭には以下のように研究目的が述べられている：

- ① 「日本語の発話者が発話場面において常に行う多彩な、多面的なネゴシエーション（切りぬける行為・交渉・談判・掛け合い）に注目し、発話場面の総体に広がる発話者自身の複合アイデンティティに考慮しつつ、日本語という言語を用いて、発話者自身が、自分（もしくは、または同時に〈わたし〉〈あたし〉〈おれ〉〈ぼく〉など）でいるために、どのような行為を遂行するのか、という問いに応じようとするものである」(p.1)

上記の引用部分以外にも以下のように所々で研究目的について触れている：

- ② 「…本研究は、日本語話者がどのように強制的なジェンダーをネゴシエーション…するのかを検討することを目的としている」(p.2)
- ③ 「本研究は、単一ではないアイデンティティ、つまり、発話者の複合的アイデンティティ…の実態を検証することを志す」(p.3)
- ④ 「…社会が規定するジェンダーを日本語話者がどうネゴシエーション（切りぬける・交渉・談判・掛け合い）するのかを考察」(p.5)

上記①～④から、本書の目的は三つあることがわかる。第一に「強制的なジェンダーのネゴシエーションのありかた」の解明、第二に「複合的アイデンティティの実態検証」である。そして（おそらく）これらを総合する形で第三に「発話者が自分で行っている行為とは何なのか」を探ることが目的とされている。これらのことを確認した上で、次に本書の中心概念である「複合(的)アイデンティティ」と「ネゴシエーション」を検討する。

3 キーワード

3-1 複合(的)アイデンティティ

上記確認したように本書の目的の一つであり、また中心概念ともなっている「複合(的)アイデンティティ」は次のように説明されている（ページ順に該当箇所を抜粋）：

- ①「発話者の複合アイデンティティとは、つまり、発話者が常に切り抜け、交渉し、談判し、掛け合う、発話時における自らの複合的な総体である」(p.2)
- ②「…単一ではないアイデンティティ、つまり発話者の複合的アイデンティティ…複雑に絡みあい、豊富な矛盾を抱えるアイデンティティ」(p.3)
- ③「…発話者が談話において複合的なアイデンティティを身体化し、発話を通して遂行するという行為は、間発話者的な相互作用の効果に基づき…発話者が行う行為…においてのみ現象する」(p.36)
- ④「また、ジェンダーは、固定した意味を持たず、会話が行われる場面・話題・参加者の関係性・参加者が遂行する複合的アイデンティティによって、その意味性は変化する」(p.49)
- ⑤「…従って、流動する複合アイデンティティに『中核』はない。故に、複合アイデンティティとは、あらかじめ用意された『話し手・聞き手役割』並びに『社会的・職業的役割』と同質のものではない」(p.125)
- ⑥「…発話時において実践される複合アイデンティティは、一時的(transient)でありながら、経験的な記憶として発話者の言語行動において体験され続ける」(p.125)
- ⑦「…複合的アイデンティティは、発話者の実践的な言語行為の前提ではないし、発話行為を遂行することにより残留するものでもない…。それは、発話の特定の場において、様々な規定や関係性のなかで選ばれる、ネゴシエーション…し続ける発話者の『自分』——つまり、現時点における発話が実施する主体性および、言語運用上の行為体である」(p.125)

このように様々な説明が加えられているものの、依然として不明な点が残る。まず、「複合的」であり(上記引用①)、「複雑に絡み」あっている(上記引用②)というからにはそれが何らかの複数の要素から成り立っていると考えられるが、それらの要素とは何であるかについての明確な定義がなされていない(例えば「発話によって形作られたAという複合的アイデンティティ

はa, b, cなどから成りたつ」という言明はなされていない) という点があげられる。もしそういった各要素というものが存在するのであれば、それが何か固定した意味を持つものなのか、要素自体も流動的なのか、それぞれの要素もまた複数の下位要素から成り立っているのかといった点が不明である。その一方で、「『女性』『男性』の複合性を根本においた視点が不可欠である」(p.29) という指摘もあり、本書でいう「複合アイデンティティ」は従来の異性愛規範で言われてきた「女性」「男性」がからみあったものを指している、と推測することも可能である。しかし、もしそうであるならば、本書の言う複合アイデンティティがなぜその「男性」・「女性」という要素のみから成り立っているのか、他の要素(社会的地位・年齢・地域差など)を考慮に入れる余地はないのかという点についてはさらなる説明が必要だと思われる。

次に、この複合アイデンティティが発話行為において現象するものでありながら、残留せず、経験的な記憶として体験され続けるとされているが(上記引用⑦)、なぜ残留せずに経験的な記憶として体験され続けるのかの論証が不十分な点があげられる。本書ではバトラーの主張を援用しながらもさらに一歩進んでその行為体は「残留しない」とするが、なぜ残留しないのかを裏付ける論証が見当たらない(この「残留しない」という部分を根拠に、本書では談話の参加者がメタ言語的に自分の言語行動を振り返り、それについて語る部分をもとに議論を進めている)。はたして本当に「残留しない」と言えるのであろうか。本書で言う発話という行為は現実世界で実際になされるものであり、会話でストラテジーを用いることで複合アイデンティティが現われる(現象する)のであれば、発話者自身のみならず少なくともその会話に参加している者、会話(談話)を録音し談話資料として後に分析する研究者にはその発話場面に現われた話者の複合アイデンティティを現象として捉えることができるのではないだろうか。そうであれば、何もメタ言語的に自らの発話を振り返る部分のみを分析対象とする必要はないのではないか。

さらに、複合アイデンティティの特徴としてそれが「遂行されるもの」・「流動的」・「一時的」(上記③・⑤・⑥)であると言うが、これはゲイ・レズビアン・バイセクシュアルのアイデンティティのみにあてはまるものなのかが不明であり、それ以外の、例えばトランスの人々のアイデンティティや

MSM (men who have sex with men) の人々のアイデンティティ、さらに異性愛アイデンティティにはそういった特徴が見られないのかという疑問が浮かぶ。仮に異性愛アイデンティティが複合的なものであるとするなら、それはどのような要素からなりたち、どういったストラテジーの使用によって現象するものなのだろうか。また、ジェンダーの意味が複合アイデンティティによって変化するという点について(上記引用④)、どういった作用が及ぼされた結果、AからBというように意味が変化した、ということが言えるのかが明らかではない。こういった点を考慮し、さらに充実した記述が望まれる。

3-2 ネゴシエーション

上記研究目的の箇所を確認したように、本書では言語ストラテジーの一つとして「ネゴシエーション」が認められるとする。このネゴシエーションは次のように特徴づけられている(ページ順に該当箇所を抜粋):

- ①「ネゴシエーション(切りぬけ・交渉・談判・掛け合い)は、発話者から相手へ、また相手から発話者へ、異なった回路を通過する双方向的…な行為である」(p.124)
- ②「ネゴシエーション…という行為は発話者同士、双方において行われる言葉上の掛け合いである。これは、特定の発話行為における具体的な発話者同士の掛け合いであり、発話者個々人が規範を切り抜けるため、…意識的に行う行為である」(p.124)
- ③「また、複合的なコンテクストをネゴシエーション…する創造的な言語行動を通して、発話者は『自己』を構成・遂行し、また、『自己』が構成・遂行されるのである」(p.127)
- ④「発話者が個々の発話場面やその場面に現出する人間関係を『自分らしく』切り抜ける行為を『ネゴシエーション行為』と名付け…」(p.195)

このネゴシエーションという概念についてまず指摘すべきは、括弧内に日本語訳が与えられていることからわかるように、異なる四つの行為(切りぬけ・交渉・談判・掛け合い)を包括する概念として用いられているにもか

ならず、それぞれの行為をネゴシエーションとしてなぜ一つに括らなければならなかったのか、この四つの行為は互いにどのような関係にあるのかということが明らかにされていないという点であろう。中心概念となる部分だけにさらなる説明が必要だと思われる。

第二に、例えば発話者とその相手の聞き手という二人の人物がかかわるコミュニケーション場面を想定した場合、「双方向的」な行為としてネゴシエーションは発話者と聞き手(=次の発話者)が互いに用いる言語手段であるということになる(上記引用①・②)。しかしながら、談話資料3~7(pp.75-80)を用いたオネエ言葉の考察では、オネエ言葉の特徴(資料3)、パロディ性(資料4)、自己紹介にみられるオネエ言葉(談話5)、オネエ言葉とジェンダー(資料6)、オネエ言葉のきつさ(資料7)について考察を加え、「オネエ言葉は、社会において混同されるジェンダーとセクシュアリティをネゴシエーション...する実践的な言葉遣い」と結論づけているが(p.81)、直接発話を引用した談話資料5では「信恵ですー」という発話者が誰と双方向的なネゴシエーションを行っているのかが明らかではない。そしてそこにいるとされている相手はどのようなネゴシエーションを行っているのかが不明である。同様のことは本書5.2.の自称をめぐるネゴシエーションについても指摘できる。「双方において行われる」戦略としてのネゴシエーションというのであれば、両者がどのようなネゴシエーションをしているのかを示す必要があるだろう。

第三に、3-1で見たように本書でいう複合アイデンティティは遂行され現象するものであるが、同じようなことが「自己」についても言えるという(上記引用③)。そうであればこの「自己」と複合アイデンティティはどのようにかかわっているのか。発話者が「自分らしく」ネゴシエーションする場合(上記引用④)、本書で想定されている「自分らしさ」というのは固定したものなのか複合アイデンティティのように流動的なものなのか、ネゴシエーションによって現われる複合アイデンティティは「自分らしさ」とどのようにかかわっているのか、さらに「~らしさ」というものは、例えば他者から「あなたらしくないですね」と指摘されるようなものなのか、研究者が談話資料をもとに発話者らしさがあらわれているか否かを指摘することができるかなどの点をさらに詳しく説明する必要があるだろう。

4 方法論

終章である第6章では結論を提示しない理由およびこの研究がもつ意味について述べられているが、ここで本書の方法論について指摘しておく。

4-1 データ開示について

本研究では日本語話者による座談会（対談）とその後行われた参加者へのインタビュー記録を第一次データとする。それが文字に起こされ、「談話資料1」や「談話資料2」という目に見える形の会話データとして読者に提示されるが、それは部分でしかない。全会話というのは分量的にもかなりの量になると思われるが、少なくとも巻末にどういった会話の流れの中（コンテキストの中）でその話題に及んだのか、ということがわかるような形で前後の会話を提示してもよかったのではないだろうか。この点について本文では次のように述べられている：

「本研究の会話データの全会話を公開しないのは、同様の理由（筆者注：倫理上の責任が重要であること）に基づく選択である。参加者の権利を重視し、研究記述と直接に関連すると思われる談話のみを利用した」（p.64）

被験者の会話から特定の部分のみをコンテキストから切り離し、それに対して考察を加えることは、はたして参加者の権利を重視することになるのか疑問が残る（特に pp.146-47 の分析は資料の提示がなく、部分的な発言の引用となっている）。紙面の都合もあったであろうことが想像されるが、一定のコンテキストを示すことによって読者にもさらにわかりやすいものとなると思われる。

4-2 質的解析と量的解析

本書の研究は筆者自身によって質的な分析法であると位置づけられている（p.164）。量的分析を採用しない理由として、「近年のジェンダーと言語の研究

においては、言語要素の比較使用頻度分析のみを用いるだけでは不十分であることが繰り返し指摘されて」(p.164)おり、「本研究の談話資料を用い、言語単位の使用頻度などのデータを得ることはできる。が、そのような方法では…話者自身の多面的な複合アイデンティティ」やそれに対する意識などが明らかとはならないためだとする(p.165)。つまり、量的解析のみでは不十分であるということである。しかし、量的解析に質的解析を併せた分析の可能性もある。それについて本書は、従来そういった研究には「現在の言説体系が引き起こす束縛を明示的かつ相互作用的に捉える姿勢は、残念ながら、ほとんど確認できない」(pp.164-165)と指摘する。この主張にも首肯できる点はあるものの、従来の量的解析に質的解析を加えた研究にそういった「姿勢」が見られないからといって、その方法自体が有効性を失うということにはならない。「姿勢」とは研究者の態度もしくは研究の視点を指すものだからである。ケーススタディとしていくつかの談話を取り上げ、そこに見られるストラテジーを質的に研究することは重要であるが、それに加えて量的な解析を取り入れることでさらに内容的に充実した分析が期待できる。

4-3 アンケート調査

上記量的解析に関連することだが、本書では複合アイデンティティの考察という点から、アンケート調査を実施しなかったとする：

「アンケート調査を行って話者自身の意識を測定することは可能であろうが、既に論じてきたように、話者は、単純にアンケートの項目として提出される『個人情報』としての「性別」や「ジェンダー」および「セクシュアリティ」などに完全に同一化するわけではないのである」(p.165)

そうであれば、そういった項目を設定せず、被験者に自分自身の言語使用についてアンケートを行うということも可能であったのではないだろうか。アンケート調査のみというのも問題があると思われるが、3-2で述べたようにそういった調査によって得られた結果を本書の主張(アイデンティティの

複合性およびネゴシエーションというストラテジーの存在)を側面から支えるものとして利用することも可能であつただろう。強制的異性愛規範が日本語に存在するという本書の前提が、どの程度のレズビアン・ゲイ・バイセクシュアル・トランスセクシュアルといった人々に認識されているのか、広く認識されているのであれば個々人はどうやってそれを乗り越えているのか、「オネエ言葉」がストラテジーであるならば、どの程度それは広まっているのか、どういった場面で用いるのか(常に「オネエ」で話すのかそれとも同じキア同士のコミュニケーションの場面に限られるのか)、仮に「オネエ言葉」を使わないというストラテジー(別の選択肢)があるとすればそれはどう捉えたらいいのか、異性愛者の中にこういった日本語の強制的な側面を嫌って何らかのストラテジーを用いる者もいるのではないかなど、個別のインタビューという手法ではなかなか捉えられない全体像もアンケートなどの手法を用いることで明らかになるものと期待される。

4-4 参与観察

本書では参与観察を「特定のコミュニティに参加しながらそのコミュニティを考察かつ研究することを意味する」と定義づけ、コミュニティの概念自体が曖昧であること、従来行われているようにコミュニティの特定ののちに参入するという順序に従っていないため、(筆者が参加者の一人として発言を行ってはいるものの)データ収集のために行った座談会は参与観察とは言えないのではないかとする。しかしながら、座談会やインタビューをそう見なすことはできないとしても、筆者は既に日本語を話すコミュニティを特定し、そこに参入し、生活をしているのであり、それ自体を(広義の)参与観察と見ることもできるだろう。また、それとは別に、こういった座談会やインタビューを「社会言語学的インタビュー」として位置づけることも可能であり(cf. Schiffrin 1994)、研究の手法として「コミュニケーションの民族学(Ethnography of communication)」を取り入れ、ハイムズの言うSPEAKINGグリッドを用いて座談会(インタビュー)を特徴づけることも可能であつたのではないだろうか(Hymes 1972)。

以上、二つのセクションでキーワードと方法論について問題点を指摘した。

最後にまとめとして今後のクリアな視点からの言語研究のありかたに触れて本稿を閉じることとする。

5 今後の方向性：「あ、兄貴、イクっす!」

英語圏では1920年代から現在まで様々な同性愛者の言葉に関する研究の歴史があり、近年は特にアイデンティティの政治学を背景にアイデンティティは特定の記号行為によって結果として生じるものであるとして研究が進められている (Cameron and Kulick 2003, 76を参照)。本書もこの流れの中で日本語におけるクリアのアイデンティティについて言語学的な視点から分析を試みたものであり、冒頭でも述べたように日本語に関して他にこのような視点からの研究がほとんどない状況にあって、画期的な研究であるといえるだろう。しかしながら、英語圏ではアイデンティティに基礎を置く研究の次の段階として、広い意味でのセクシュアリティや欲望をテーマとした言語研究が一分野として成立しつつある (Cameron and Kulick 2003; 2006 (本書p.112にもこれらの文献への言及がある))。本書で取り上げられたアイデンティティを巡る議論が重要であることは言を待たないが、そういった海外の研究状況を視野に入れたさらなる研究段階へ日本語の研究者も一步を踏み出さねばならないのではないかと考える。

例えば次のような事例がある。ゲイ同士の出会いを求める Personal ad (個人広告) などでは敬体「～です」の省略形としての「～っす」という表現が多用されており(「ガタイいい兄貴と盛りたいっす」など)、またインターネット上の仮想空間ばかりではなく、実際の対面コミュニケーションの際にも「そうっすか?」「あ、兄貴、イクっす!」というような物言いをするゲイがいる(本書第4章談話資料1・2の分析を参照)。一般にこういった言葉遣いは「体育会系」の活動に参加している者(主に学生)が用いるものであると言われていたが、敬体という特徴をもつ一方で省略形というインフォーマルな側面をもつこのような言語特徴をどのように捉えればいいのか、特にゲイの間でそういった言葉遣いが(一部にせよ)なされているのはなぜなのかを一つのテーマとして言語研究の分野で取り上げることができるだろう。広く欲望という

点から見ると、このような言葉遣いの背景には欲望のフレームとも呼ぶべきある種の型が想定されており、それに則ったものだという考え方もできる。つまり、こういった言語特徴は上述した体育会系の「先輩／後輩」というフレーム内での言語活動であるということができると考えられる。体育会系のようなホモソーシャルな社会では同性愛がタブーとされているが、逆にタブーであるからこそ欲望をかきたて、ゲイの言葉遣いの中にそのフレームが持ち込まれたと考えるのは無理ではないと思われる。その一方で、「あ、兄貴、イクっす」というような言葉遣いをするにより、そういったフレームを作り出すということも言えるだろう。

どういったアイデンティティが「あ、兄貴、イクっす!」のような発話に表れているのかという視点とは別に、「同性愛」というような狭義の「～性愛」としてではなく、広くセクシュアリティを眺めた場合、どういった欲望があるのか、その欲望を表現するためにどのような言葉がどのように用いられているのかという視点が今後の言語研究には必要なのではないだろうか。言葉とクィアの接点はもちろん「～っす」のような言語特徴のみに限られるわけではなく、またクィアな人々のみが特定の欲望をもつということもない。ここで仮に「フレーム」という言葉を使ったが、それを継承して言えば、セクシュアリティにはタチ／ウケ、SM（主人・奴隷）、セーフセックス／生、野外／屋内などその他さまざまなフレームが見られる（Eadie 2004を参照）。今後の研究はアイデンティティに着目した研究成果を継承し、異性愛規範に対する批判という側面をもちつつ、そして同時にジェンダーとの関連も見据えながら、広義のセクシュアリティや欲望が言葉といかにかかわっているかという段階へと進んでいかねばならないと考える。

参考文献

- Cameron, Deborah and Don Kulick. 2003. *Language and sexuality*. Cambridge: Cambridge University Press.
- . 2006. *The language and sexuality reader*. London: Routledge.

- Eadie, Jo. (ed.) 2004. *Sexuality: The essential glossary*. London: Arnold. =2006. 金城克哉 (訳) 『セクシュアリティ 基本用語事典』明石書店.
- Hymes, Dell. 1972. Models of the interaction of language and social life. In *Directions in sociolinguistics*, edited by J. J. Gumperz and D. Hymes. New York: Holt, Rinehart and Winston, 35-71.
- Schiffrin, Deborah. 1994. *Approaches to discourse*. Oxford: Blackwell Publishers.